

文の長さに関する一考察

—志賀直哉の方法を通して—

趙 宣 映

(2001年9月28日受理)

A note on the length of the sentence-Through the way of ShigaNaoya

Joe Sunyoung

The length of the sentence was used for the comparison of the style of the writing which is possible to show easily by the figure. However, the result tended to have fixed the style of the writer on from the easiness as the way. The shortness of the sentence was made to be the stylistic characteristic in case of ShigaNaoya which is preferably taken up by the stylistic research, too. Therefore, only "the deletion" to make a sentence short attracted attention as the way of Shiga. However, when comparing the draft and the generally accepted text of Shiga in the details, it finds that various techniques are used about the length of the sentence, too. The viewpoint to tell "the style of the writer" in the length of the sentence must be reconsidered. In other words, it should compare not an average with the length of the sentence but the role of "the short sentence" and "the long sentence" at each writer.

Key Words: the length of the sentence, style, ShigaNaoya

キーワード：文の長さ、文体、志賀直哉

1. 問題の所在

文の長さは、数字で簡単に表わすことができるという特徴から、書き手間の文体の比較に用いられてきた。しかし、方法としての容易さから、その結果は、書き手の文体を固定した一面的な考察になりがちであった。文体研究で好んでとりあげられる志賀直哉の場合も、文の短さがその文体特徴であるとされてきた¹。そのため、文を短くさせる「削除」のみが、志賀の方法として注目されることになった²。しかし、志賀の草稿と定本とを詳細に比較すると、文の長さに関しても様々な手法が用いられていることがわかる。例えば、文を長くする改変も見られ、具体的には、読み手を場面に引き込むべく「初登場」の場面に長文を用いていることなどが指摘できる。また、短文についても、連続した出現に注目することで、その効果が、単に簡潔さを図るためだけではないことが指摘できる。文の長さによって「書き手の文体」を語るという観点は見直される必要がある。つまり、文の長さの平均ではなく、各々の書き手における「より短い文」と「より長い文」との

役割を比較すべきではないかと思うのである。

本稿では、志賀直哉の初期から晩年におけるテキストの草稿と定本を比較する方法をもって、文の長さに関する工夫を考察する。

2. 文の長さに関する従来の考察に関して

波多野完治(1965)³は、谷崎潤一郎の『金と銀』と志賀直哉の『雨蛙』を、文の長さ、句読点、品詞、比喩、構文において比較した。そこで、長文は言葉の持つニュアンスを積極的に利用する場合、短文は言葉を通して見透かされる物自体のニュアンスに依存しようとする場合に用いられるとする。結論として、谷崎は言語を中心に、志賀は物や事件に語らせているという。ここで注目しなければならないのは、これらは、一見長文と短文の比較の結果のようにみえるけれども、実は谷崎の文と志賀の文の比較にすぎないということである。少し強引ないいかたをすると、そこでたまたま谷崎の文の長さの平均は長く、志賀の文の長さの平均は短かっただけである。

前川守(1995)⁴は、志賀直哉を含む10人の作家⁵の文の長さ、読点、句・文節の長さ等を比較した。その結果、文の長さは作者の個性とみなしうるほど固定的な傾向を持ち、さらに読点の使い方は句点の使い方とは独立し、文体の重要な要素であると指摘する。

以上に見るように、文の長さは各々の書き手の文体を比較する一要因として扱われてきたものの、実際比較されたのは文の長さの平均値であったのである。以下に典型的に短文の書き手として認識されてきた志賀直哉の文の長さの工夫を考察することによって文の長さの平均が持つ盲点に関して考えてみることにする。

3. 考察方法：草稿と定本の比較⁶

草稿はその書き手のなかで、自分のテキストになっていないと思われるものである。そこで、この草稿と定本を比較することによって、書き手がどのような方法を施しているのかを垣間見ることができる。

ここでは、初期から晩年までのテキストを分析対象にする。分析したテキストの草稿の成立および発表時期等は表1に示した。

〈表1〉分析テキストの概観

テキスト	草稿の成立	発表年月	発表紙誌
「菜の花と小娘」	1906年 4月2日	1920年1月	『金の船』 2巻1号
「速夫の妹」	1908年 9月5日	1910年10月	『白樺』 1巻7号
「ある一頁」	1909年 9月14日	1911年6月	『白樺』 2巻6号
「十一月三日 午後の事」	1918年 11月7日	1919年1月	『新潮』 30巻1号
「灰色の月」	草稿に 明記なし	1946年1月	『世界』 創刊号

考察方法としては、草稿と定本に通し番号を付け、一文ずつ綿密に比較考察する方法を取った。そこで、考察対象にするテキストは、『志賀直哉全集』⁷に草稿が翻刻されているテキストのなかで、そのあらすじが大きく変わらないものを対象にした。これは、内容の面の改変ではなく、文の改変を中心に考察するためである。具体的に作品名を挙げると、「菜の花と小娘」「速夫の妹」「ある一頁」「十一月三日午後の事」「灰色の月」の草稿と定本である。

4. 志賀の文の長さに関して

草稿と定本を比較した結果を基に、文の長さに関する志賀の工夫を考察する。従来言及されてきたのは、志賀の文が短いということと、それは、簡潔さを図るためであるということであった。ところが、前述したように実際に草稿と定本を比較してみると、削除のみではなく添加されている文も少なからずある。また、削除された場合でも、簡潔さのためであると言い切るには物足りない感がある。以下に、短文および文を羅列する、文の長さを合わせる、文を長くすることに関して、それぞれの効果に関して考えてみる。

4-1. 短文を羅列する

草稿と定本を全面的に比較してみると、比較的短い文がまとまって添加、つまり新たに加わっていることがわかる。以下の例がそれで、短文が羅列されている。これは、やりとりをする場面の添加として注目したい。以下に異なるテキストからの例を3つほどあげる。

〔例1〕

定369 「大村さんは今度の白馬会へ四枚出したんですって」

定370 「見ましたか？」

定371 「いいえ、今度の日曜日に誘ひに来るんですって。

定372 貴方もいらつしやらない？」

定373 「日曜は駄目」

定374 「そんなら何時がいいの？」

定375 「只の日の方がいい」

定376 「切符が来てゐるから上げませう」

定377 かういつて自分の部屋へ入ると長原止水のデザイナーの招待券を二三枚持って来て、「勝手な日にいらつしやればいい」といつて手渡した。

(「速夫の妹」)

〔例1〕の定369から377は、速夫の妹であるお鶴とはじめて二人きりで話する会話の文が直接引用され添加されている。つまり、〈私〉と〈お鶴〉のやりとりである。この両者間のやりとりが行われることによって、両者間に何か特別な感情がうまれてくるのではないかと思わせる場面である。この場面が添加されることによって、二人の間の感情の変化がうかがえるのである。

このようなやりとりはテキストの主要場面によく現れており、〔例2〕および〔例3〕でも両者間の会話が添加されていることがわかる。

〔例2〕

- 定462 「それなら、お床を延べませうか」
 定463 「あのね、晩の急行は何時かネ」
 定464 「上りでムいますか？」
 定465 「ああ」
 定466 「七時五十分です」
 定467 「まだ間に合ふね」
 定468 「間には合ひますが、今晚御立ちでムいますか」
 (「ある一頁」)

〔例3〕

- 定51 「それで、いいのよ」
 定52 小娘は云ひました。
 定53 「いやなの。
 定54 休むのはいいけど、かうして居るのは気持が悪いの。
 定55 どうか一寸あげて下さい。
 定56 どうか」と菜の花は頼みましたが、小娘は、「いいのよ」と笑つて取り合ひません。(「菜の花と小娘」)

〔例2〕の場面は女中と彼のやりとりで、京都をその日に発とうか発つまいかと迷っている場面である。このあとついに京都を発つようになる。つまりこのやりとりは、話の流れを変えるために添加されたと思われる。〔例3〕もようやく菜の花と小娘が取り合う場面である。このように短文を羅列することによって、話の転換を自然に感じさせる効果があると推定できる。

4-2. 文を羅列する

次に、草稿では一文だったのが、定本では複数の文が並べられるようになる例である。これは、文が分割され、さらに、文の添加が伴われる場合が多い。

〔例4〕をみると、草稿は、445の文のように、動作や状況を描写する一文のみであった。ところが、定本では定本376と379のように二つの文に分割され、定377のような感情を表わす文や378のような文が添加され、複数の文が羅列されるようになっていく。このような文の羅列は、添加された感情描写を助けるためであると思われる。つまり、文を並べることによって、ある感情を引き起こす「段階」として役割させようとしていると判断される。この傾向は、先ほどの短文の添加による羅列でも指摘したように、複数の文を羅列させ読み手に感情の変化を感じさせたのと相通ずる。〔例5〕の場合も、定387のような感情を描写する文の添加に伴って分割が行われたとみることができる。

付け加えると、このような文の羅列が「ある一頁」に多いのは、「ある一頁」の主人公が草稿では<私>だったが、定本では<彼>に代わったために、<彼>の感

情変化を読み手に確認せざるを得なかったのではないか。

〔例4〕

- 草445 下御霊神社の前の家の返事を兎も角聞いて置くのもよからうと、丁度北野行き電車が来たのでそれへ乗る。
 ↓
 定376 彼はもう一度下御霊神社の家へ行つて、分割
 先刻の分割返事でも聴いて来ようかしらと思つた。
 定377 彼には其時自暴自棄に近い気分があつた。添加
 定378 それをすればもう今日といふ日に行く所添加
 もなくなるのだ。
 定379 かう思つて彼は丁度其処に待ち合せてゐる分割
 た北野行の電車に乗つた。
 (「ある一頁」)

〔例5〕

- 草449 そんなら高等女学校があるだらう、あの大分手前だといふと向ふに坐つてゐた女が、ちや御所の角の一つ此方を切つて上ればいいと車掌に教へた。
 ↓
 定384 「高等女学校を知つてるか？」といつた。分割
 定385 車掌は笑ひながら、「ええ知つてます」と云ふ。添加
 定386 「あの大分手前だ」分割
 定387 彼はイライラして来た。添加
 定388 其時向ひ合つてゐた女が、「ちやあ、御所の角の一つ此方を切つて上げたらいい」と車掌に注意した。分割
 (「ある一頁」)

4-3. 文の長さをあわせる

次は、文が添加されてあるが、文の削除が伴なわれていると認められる場合である。このように削除と添加が同時に行われている複数の文、つまり、〔例6〕の定本の178から182の文には感情描写がなされているとみることができる。ところが、この部分には、草稿の268から274の文の削除が行われているところで、ここにも感情描写がなされている。つまり、ここでは単に感情描写の文が添加されているとみることはできない。ここで、この削除された文と添加された文の長さを比較してみる。すると、草稿では、下記の〔例6〕のように「」の部分を除いても、草271と草273の長さの差は画然としている。つまり、長文と短文が入れ混じっている。ところが、定本においては、定180が少し長いだけで、ほぼ一律の長さを維持しているといえる。つまり、文の長さのある程度あわせることによって、よ

り淡々とした感情描写ができたのではないか。〔例7〕の場合も同じことがいえる。このような文の長さをあわせる工夫は注目に値する。

〔例6〕

<削除>

草268 「ひどい。

草269 全くひどい」と思った。

草270 命がけの気持を見る時に一種悲壮な感じが起るものだ。

草271 それが、どんな事でもその根が人類の為に根ざしたものであれば淋しく苦しい中に、ある美しい涙ぐましい感じを伝えられるものである。

草272 然し今見たものに対して全くそんな感じはしなかった。

草273 自分には涙が出て来た。

草274 然しそれは愚かさに対する怒りでなく何か。

(「十一月三日午後の事」)

<添加>

定178 自分は一人になると又興奮して来た。

定179 それは余りに明か過ぎる事だと思った。

定180 それは早晩如何な人にもハッキリしないでは居ない事がらだ。

定181 何しろ明か過ぎる事だ、と思った。

定182 総ては全く無知から来てあるのだと思った。

(「十一月三日午後」)

〔例7〕

<削除>

草392 お鶴さんは今までの多人数が急にへつた寂しさから、自分と話したがるのかも知れない。

草393 けれども自分は左う思ひたくなかった。

草394 又、左うバカリではないと思へる事も度々あつた。

草395 それまではお鶴さんは、誰れの前でも話したい事があれば平気で自分に話しかけてゐた。

草396 然し今は大変、変って来た。

草397 速夫が此部屋を出ると、直ぐ話しかけるか入って来るかする。

(「速夫の妹」)

<添加>

定383 二人の間には実に話の種がなかった。

定384 けれどもお鶴さんは何か種を拵へては話しかけた。

定385 阿母さんの声で間もなくお鶴さんは下りて往つた。

(「速夫の妹」)

4-4. 文を長くする

簡潔な文をもつといわれてきた志賀においては、文

の結合はあまり考えられない改変と思われるが、実際には、結合されている例が少なくない。それでは、結合の割合がもっとも高い「灰色の月」の全例を以下の<表2>にあげ、そのパターンをみることにする⁸⁾。

「灰色の月」では草稿の総12文が、2文ずつ結合され、定本では6文になっている。なぜこれらの文は結合したのであろうか。もし、結合しながら削除がある場合は、外観の文の長さも短くなり、簡潔になっていると認めることができる。ところが、この6例の中で、結合しながら削除があったのは、定57と62の2例あるのみである。つまり、文の結合によって文は長くなる場合が多いといえるわけで、志賀は文をあえて長くしたのである。その理由を探るため、それぞれの例を詳しくみていく。

定9は、<少年工>が初めて登場する場面である。2つの文で表現されている草稿と、一つの文になっている定本の場合、その伝達する情報の内容自体は大きく変わらない。ところが、草稿の場合、二つの文になっているので、二つの別の情報があるかもしれないということが期待される。一つの文が完結された時点(外観的にいえば、句点のところに来たとき)で、その文はすでに記憶の中の文になる。ところが次の文に移った時、戸惑いを覚えなければならない。前の文を記憶の中から呼び出して、あわせて考えなければならない文であるからである。場合によっては、前の文にもう一度戻るようなことになるかもしれない。これに比べて定本では、読点はあるものの、一つの文の中でその情報を十分得ることができる。少年工の初登場だからこそ、一つの文で表現し、十分親しませるようにする必要があったのではない。

「ある一頁」でも、「速夫の妹」でも、結合されている文は「初登場」(テキストに初めて何かを導入する場面)の場合が多い。情景の初登場であろうが、人物の初登場であろうが、また、人間関係の初登場(成立)であろうが、初めてのものは長い文をもって表現することによって、ゆっくりその世界に導いていると考えられる。慣れない世界への衝撃を安らげるクッションとして、長い文がおかれているともいえるのである。

次に、定62は、少年工の退場場面である。ここで注目したいのは、草59と63が結合されたことである。その間にあった草60と草62も結合されており、草61は削除されている。草稿では、少年工の動作と言葉を別の文で、それも3文の距離をおいて表わしていたが、定本ではその少年工の言動を一つの文に合せて表現している。この文以降、少年工に関する直接的描写は終る。すると、少年工の登場(定9)と退場(定62)の文がそれぞれ結合されていることが分かる。登場の場

合と同じく退場に伴う衝撃を緩和する効果があるといえよう。

〈表2〉「灰色の月」の文の結合

文番号	草稿	文番号	定本	分類
9	左には少年工と思われる子供が、私の方を背にしている。	9	左には少年工と思われる{十七八歳の}子供が、私の方を背にし、座席の端の袖板がないので、入口の方へ真横を向いて腰かけていた。	単純結合
10	座席の端に、袖板がないので、入口の方を向いて真横向きに腰かけていた。			
33	「さうですか」	38	男は一寸驚いた風で、黙って少年工を見てゐたが、「さうですか」と云つた。	埋め込み結合
34	さういつてその男も一寸いたましいといふ眼つきして、子供を見ろした。			
56	子供は戦闘帽を後前に被つてゐた。	43	後前に被つた戦闘帽の{箱の下}のよごれた細い首筋が淋しかつた。	埋め込み結合
57	その首筋が淋しかつた。			
52	「東京駅からみたから、逆に乗つたんぢやない。」	57	「東京駅でみたから、乗越して来たんだ。」	単純結合
53	乗越して来たんだ。			
60	「渋谷からぢやー、まはりしちやつたよ。」	61	誰か、「渋谷からぢやー、まはりしちやつたよ」と云ふ者があつた。	埋め込み結合
61	可哀相に……			
62	こんな事をいふ者があつた。			
59	そして如何にも太儀さうに額を窓ガラスに押しつけ、窓外を見ようとしたが薄曇りの月夜でおぼろ気にしか見えなかつた。	62	少年工は硝子に額をつけ、窓外を見ようとしたが、{直ぐやめて、}漸く聴きとれる低い声で、「どうでも、かまはねえや」と云つた。	単純結合
63	子供は殆ど口の中で、「どうでもかまわねえや」といつた。			

5. おわりに

以上のような考察を通して、志賀直哉は長い文と短い文を巧みに取り入れているといえる。その方法としては、従来あまり注目されることのなかった文の添加や結合などが用いられている。

まず、比較的長い文は、主に、文の結合によって現れるようになり、このような文は、「初登場」、つまり新たな人物・事柄の紹介やある場面の導入のために用いられている。すなわちこれは、読み手にとって親しみのない内容が長い文に盛り込まれることで、読み手が読む速度を一旦落とし、それがその場面に入っていくための扉をあける効果を狙ったものと解することができる。このような長い文は、志賀にとっては例外のように扱われてきた。これは、志賀の文は短いという固定観念の強さを物語っているとも言えようか。しかし、「初登場」における、敢えて文を結合し長い文を用いる志賀の工夫は、普段が短い文であるがために一層効果的である。

一方の比較的短い文に関しては、複数の文が添加されたり、または、文が分割された後にさらに添加があったりするなど、比較的短い文が連続して現れる場合が目立つ。そして、このような文は、登場人物間のやりとりを通して感情の変化を表わしたりするなど、主要場面に現れる。これは読み手に感情の流れを感じさせる段階として機能させようとしたのではないかと思われる。換言するなら、その段階を踏むことによって、読み手にその感情の変化が自然に沸きあがるよう期待したと推定できる。

もっとも、従来の多くの研究において、感情の移り変わりがある部分などが中心に考察されてきたので、短文のみが注目されたのは当然な結果である。さらに長文が少ないのは、短篇の中で初登場の場面はそんなに多く見られないだろうということから、すぐ理解できるだろう。

従来の研究において主に扱われてきたのは短い文であり、その短さには十分焦点が当てられてきた。ところが、その短い文の簡潔さのみに目が向けられ、連続している文に関しても淡々と語っているというように、どちらかといえば静的なイメージが検討されてきた。ところが、本稿で考察できた複数の短い文の羅列は、動的なイメージを浮彫りにしていると言えるだろう。というのは、主要登場人物間の関係の変化やある事柄の進展のような場合、この連続した短い文が用いられるからである。つまり、短い文を並べることによって、感情を動かしている。この点、草稿を通して明らかになった、志賀の方法として重視すべきである。もっとも、これまで注目された志賀の文というのは情景を描写する文が多く、人物間のやりとりなどはあまり注意を引くことがなかった。そしてこれは、代表作として称えられている、「城の崎にて」の印象が強いためではないだろうか。これも志賀に関する固定観念の一つとして、念頭におくべきである。

以上の長い文と短い文に関して議論する際に、その長短の基準に関して考えてみる必要がある。従来、志賀の文が短いといわれたのは、実は、他の書き手に比べて短いということであった。これは、複数の書き手の文の平均的長さを比較した際に出された結果なのだ。そして、そこで志賀の文が比較的短いとされたため、短い文のみに焦点が当てられてきたことについては既に言及している。ところが、志賀の文の長さにはいわゆるばらつきがあるとの指摘⁹がある。つまり、平均的には短いけれども、その平均から大幅に外れる短い文があれば長い文もあるということである。にもかかわらず、志賀のその長い文が目されることはあまりなく、ばらつきのもう一方の短い文のみが主に議論されてきた。つまり、その短い文は、平均的に短いというときの長さの短い文ではなく、志賀の文の中で最も短い文の場合が多かったのだ。勿論平均より短い文が多いために、長文があったにもかかわらず、平均的な長さが短くなったのは事実であるが、そのずれは無視できない。

ここで、文の長短というのは、その書き手の中で考える必要がある。というのは、志賀の文が平均的に短いといっても、上記したように長い文もあれば、より短い文もあるからである。しかも、その用い方に異なる傾向が認められるとしたら、他の書き手より短いということより、その書き手内の文の長さの変化に注目すべきであるといえよう¹⁰。

それでは、志賀の短文と長文の使い分けはどのように意味付けられるものであるのか。これについては、読み手をテキストの中に積極的に介入させようとした志賀の方法として確認できる。つまり書き手としての志賀はなによりも、読み手の呼吸を大事にしたと思われるのである。さらに、これは、従来志賀のリズムとして認識されてきたやや抽象的な観念を裏づける表現方法の一つとしても把握できるだろう。

引用文献

河上清孝 (1992) 「「菜の花と小娘」論」-「草稿」「初出」の比較検討を通じて」町田栄編『日本文学研究大成：

志賀直哉』図書刊行会(『湘南文学』12, 1978, 再収録)
趙宣映 (2000) 「文体研究における草稿採用の方法—志賀直哉のテキストを例として」『広島大学教育学部紀要第二部』、第49号、pp. 255 - 262
波多野完治 (1965) 「谷崎・志賀両氏の文章の形態的相違」『文章心理学 (新稿)』大日本図書
原子郎 (1976) 「『網走まで』論」『国文学解釈と教材の研究』21巻4号、pp. 134-138
前川守 (1995) 「作家と文体」『文章を科学する』岩波書店
安本美典 (1960) 『文章心理学入門』誠信書房

(注)

¹ 例えば、安本美典 (1960)

² 例えば、河上清孝 (1992)、原子郎 (1976)

³ 波多野完治 (1965)

⁴ 前川守 (1995)

⁵ 夏目漱石、志賀直哉、川端康成、太宰治、吉本ばななの各2編ずつ、谷崎潤一郎、井上靖、村上春樹、村上龍、大江健三郎の各1編ずつ

⁶ 改変の項目等詳しい考察方法に関しては、拙稿(2000)を参照

⁷ 『志賀直哉全集』(1973-1974、岩波書店)

⁸ ——と{ }は、それぞれ節および句の削除と添加を示す。

⁹ 波多野 (1965)、前川 (1995)。

¹⁰ さらに、本論においては、短い・長いというときの基準は絶対的なものではないことを断っておく。

(付記)

本稿は、日本文体論学会第74回大会 (2000年11月25日、於神戸女学院大学) における口頭発表を基に、加筆修正を施したものである。研究発表の機会を与えて下さった文体論学会の関係者方々にこの場をお借りして感謝の意を表したい。

(主任指導教官：相原和邦)